

I. 導入

おはようございます。イエスは十字架に架けられ、三日後に死からよみがえり、さまざまな場所で弟子たちにお姿をあらわされました。イエスは、彼らと食事をともにしたり、自分の体に触れるよう言ったりされました。これは、イエスが幻や亡霊ではなく、本当に生きておられることを弟子たちに確信させるためです。あるとき、二人の弟子たちがエルサレムからエマオへ向かって歩いていると、イエスがあらわれ、二人とともに歩かれました。そして、**ルカ 24:27**には、イエスが彼らに聖書を教えたとあります。「そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」



ここで重要なのは、その日イエスが聖書の説明をされたとき、まだ新約聖書は書かれていなかったという点です。イエスは、旧約聖書がイエスの来臨と、十字架の死と復活を含むイエスの使命について預言していることを説明されました。旧約聖書はわかりにくいと一般的に思われがちですが、旧約聖書がイエスについて教えているのだと認識すれば、わかるようになってきます。



先ほど、聖餐式にあずかりましたが、その際、**マタイ 26:26-28**を読みました。「**26:26** 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。『取って食べなさい。これはわたしの体である。』**26:27** また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。『皆、この杯から飲みなさい。**26:28** これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。』」聖書の内容や教会に慣れ親しんでいない人なら、この箇所は奇妙に思えるでしょう。なぜイエスは弟子たちに自分の体を食べ、自分の血を飲むようにおっしゃるのでしょう。ぞっとするような話です。

しかし、その背景を見ていくと、これが過越しの祭りの時期だったことがわかります。そして、イエスは弟子たちと過越しの食事をともになさっていたわけです。ユダヤ人は、毎年行われる過越しの祭りで、主がモーセを用いて偉大な奇跡を起こし、奴隷だった先祖たちをエジプトから救い出されたことを思い出します。ユダヤ人がエジプトを出る前夜、それぞれの家庭で小羊を焼いて食べました。そして、その小羊の血で家に印をつけ、神の裁きを免れました。そのとき命拾いするためには、モーセをとおして語られた神のことは信じて従わなければなりません。そして、小羊の犠牲と血は信仰のしるしとなり、これに従った人々には裁きが下らず、彼らを過ぎて行ったわけです。



イエスの時代には、ユダヤ人はすでに過越しの祭りを 1,500 年近く祝っていました。毎年、そのときのことが語られ、人々は血と小羊のことを思い起こしました。弟子たちはこういう背景を念頭に、私の体を食べなさい、私の血を飲みなさいというイエスの言葉を聞きました。これは、文字通りそれを執り行うという意味ではありません。むしろ、弟子たちがイエスに 100%の信仰を置くべきであることを説得力のある方法で伝える象徴的な言葉でした。次の日、イエスは、十字架上で新しい過越しの小羊とされました。これは、過越しの祭りで象徴的に描かれた預言の成就です。

バプテスマのヨハネがイエスのことを何と言っていたか覚えていますか。ヨハネ **1:29** にはこう記されています。「その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、

世の罪を取り除く神の小羊だ。」この言葉は、十字架で成就しました。イエスがこの世の罪のためのいけにえとしてご自身の命をおささげになったからです。多くの芸術家が、こういったことを人々に伝えようと、作品でこれらのテーマを結びつけています。このイースターのタペストリーでは、聖餐式のパンとワインが十字架や小羊、そして平和の象徴であるハト、復活を祝う花といっしょに描かれています。



イースターはもちろんイエスの復活を祝うものです。ですから、この作品のメッセージは、イエスがこの世の罪を取り去る小羊であることを聖餐式をとおして覚えることです。また、イエスの死と復活が、神との平和をもたらすことです。つまり、イエスが私たちの過越しの小羊であり、イエスに信仰を置く者は誰でも裁きを免れ、天国の神の臨在の中に喜びをもつて入れるということです。

これは、非常に簡単な説明ですが、今日の聖書個所の背景として皆さんにお話ししようと思いました。では、今日の聖書個所、使徒言行録 12:1-5 を見ていきましょう。

II. 聖書朗読 使徒言行録 12:1-5, (新共同訳)

12:1 そのころ、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし、12:2 ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。12:3 そして、それがユダヤ人に喜ばれるのを見て、更にペトロをも捕らえようとした。それは、除酵祭の時期であった。12:4 ヘロデはペトロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。過越祭の後で民衆の前に引き出すつもりであった。12:5 こうして、ペトロは牢に入れられていた。教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられていた。

III. 教え

今日は時間が限られているので、12章の残りは来週に見ていきたいと思います。今日の短い個所で、主要な登場人物が3人いますが、この3人から学べることがあります。今日の個所は、過越しの祭りの時期であることがわかります。そのことも覚えておきましょう。

まずひとりめの登場人物は、ヘロデ王です。ヘロデ王と呼ばれた王は何人かいますが、このヘロデ王はヘロデ・アグリッパ一世であり、イエスがお生まれになった当時に統治していたヘロデ大王の孫にあたります。それはさておき、このヘロデ王は、政治的理由からクリスチャンを迫害しようとい決めました。**使徒 12:1 「そのころ、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし、」**



このヘロデ王は、非常に悲しい運命をたどります。人々が王にへつらい、王を神だと持ち上げた時、王はそれを否定しませんでした。これは高慢のなせる大きな罪です。神だと言われた時すぐにそれを否定し、天地の創造主である唯一まことの神をたたえるべきでした。このような高慢は、モーセの時代のエジプトの王ファラオが見せた高慢と同様です。また、どの国の王や女王でも、自身を神とするなら同罪です。

たいていの場合、あらゆる理由から、神は裁きを即座にくだされません。しかし、ヘロデ・アグリッパ一世には、裁きが突然下りました。**使徒 12:22-23 「12:22 集まった人々は、『神の声だ。人間の声ではない』と叫び続けた。 12:23 するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。神に栄光を帰さなかったからである。ヘロデは、蛆に食い荒らされて息絶えた。」**ユダヤ人歴史家ヨセフスも、ヘロデ王の急死について記録を残しています。そこには、民衆の前にいた王が突然腹痛と胸痛に襲われ、5日後に亡くなったとあります。蛆がヘロデ王の内臓を蝕み、激痛と症状はすぐに現れたが、亡くなるまで5日間苦しんだということでしょう。

ヘロデ王は、政治的利益のために人を迫害するなどさまざまな罪の上に、神のみにささげるべき称賛を受け入れるという罪を重ねた際、すぐさま公衆の面前で裁きを受けました。ヘロデ王は、神に栄光を帰さなかったので、裁きを免れることがなく、主の天使に打たれたのです。それは、モーセの時代にエジプトの初子が打たれたのと同じです。ヘロデ王の一件は、唯一まことの神をたたえないすべての人に対する厳しい警告です。というのも、神をたたえないということは、自分を自分の人生の主としており、ヘロデ王と同様の高慢に発展する危険性があるからです。

使徒 12: 2には、ヘロデ王に関してこのように書かれています。「**ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。**」ということは、ふたりめの登場人物はヤコブです。教会史の専門家たちはこのヤコブを大ヤコブと呼びます。このヤコブとヨハネは、12弟子として選ばれた中のふたりで、イエスが愛情を込めて「雷の子ら」と名付けられたふたりです。**マルコ 3:17**「**ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルゲス、すなわち、「雷の子ら」という名を付けられた。**」

ヘロデ王はヤコブを殺し、その後、主の天使がヘロデ王を打ちました。しかし、このふたりの死には大きな違いがあります。ヘロデ王は主の裁きを受けて死にましたが、ヤコブはキリストの殉教者、教会の英雄として死んだのです。歴史家ヨセフスが記したように、ヘロデ王が5日間苦しんだのであれば、自分の罪を悔い改めて、神に赦しを乞うチャンスがあったこととなります。王自身のためにも、王がそうしたことを望みます。この世の人生で神の裁きを受けるのは恐ろしいことですが、神の御前で永遠の裁きを受けるのは、それよりはるかに恐ろしいことです。

一方、ヤコブは信仰の人として速やかに死を迎えました。ヨセフには、天国に帰るのはすばらしいことだという確信がありました。タラントのたとえ話の言葉を借りるなら、ヤコブがイエスのもとに帰ったときの様子が想像できます。**マタイ 25:21a**「**主人は言った。『忠実な良い僕だ。』**」ヤコブは死の苦しみを味わいましたが、裁きを受けたわけではありません。それは、彼が神の小羊であるイエスに信仰を置いていたからです。出エジプト記に登場する古代イスラエルの民が扉の柱に過越しの小羊の血を塗ったように、ヤコブは過越しの小羊の血に覆われ、裁きから救われたのです。



今日の聖書個所で皆さんに紹介したい最後の登場人物はペトロです。ヤコブの首を切った後、ヘロデ王はペトロを捕えて投獄します。**使徒 12:5**「**こうして、ペトロは牢に入れられていた。教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられていた。**」ペトロは牢の中にいますが、来週の個所で、牢には長くないなかったことがわかります。主は天使を送って、牢からペトロを救い出し、彼は他の弟子たちのもとに帰ります。その後、ローマで殉教するまで長年宣教活動を行いました。ペトロもまた神の小羊であるイエス・キリストを信じる信仰により裁きを免れた人です。



IV. 結び

ヘロデ王は神に栄光を帰すことを拒み、裁きを受けました。しかし、ヤコブとペトロは過越しを体験しました。祭りの祝いとしてではなく、真の過越しの小羊であるイエスを信じる信仰によって裁きを免れるという実体験としてです。クリスチャンにとって生きるか死ぬか以上に重要なのは、主イエスとともに歩み、この世を去る時に天国に喜びをもって帰れるという確信です。

使徒パウロはフィリピの教会に宛てた手紙で、クリスチャンの信仰の姿勢についてこのように語っています。**フィリピ 1:21**「**わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。**」 私たちも皆、このような信仰の姿勢を身につけ、過越しを実体験できるようにと祈ります。また、私たちだけでなく、家族や友人など私たちの大切な人たち、そして近隣の人々、この町

や国の人々、世界中の人々のためにも祈ります。私たち皆がイエスを知り、過越しの喜びを体験することができますように。

では祈りましょう。

V. 祈り